

メルヴィルと超越主義

——エマソン観を中心に——

星野勝利

（岩手大学教育学部）

はじめに

虚実の皮膜の不分明な地平を晴れの舞台とする虚構においては、虚と実との二つの世界は、当然のことながら、密接不可分のものである。虚の世界は、実の世界を孕む契機となり、実の世界は、虚の世界を生む母胎となる。

ホーソン（一八〇四—一六四）の短編「天国鉄道」（一八四三）も、虚実の皮膜に遊ぶ作品である。バニヤン（一六二八—一八八）の『天路歷程』（二六七八）よろしく、主人公が夢の中で巡礼の旅に出るといふ結構、しかも、そこで提示される大文字語の氾濫した寓意の世界——これは、読者をして、速やかに中世的虚の空間へと導くものである。しかしこの空間は、同時に、実の空間の侵蝕を許したものである。この作品の記された一八四〇年代は、文明の最新の利器としての鉄道が、東部を中心に新世界アメリカを席捲しつつあった時代であるが、夢と寓意の支配する世界へと旅立つ主人公は、バニヤンのそれとは異なり、旅の手段として、「馬」ではなく、他ならな

い「鉄道」を利用するのである。伝統を踏襲した虚の空間の中に、ホーソンは、堅固な実体を持つ身近な実の空間を、さりげなく潜入させるのである。

ホーソンが潜入させるのは、しかしながら、「鉄道」だけとは限らない。「鉄道」という設定が、仮りに実の世界の物質的部分と対応するとするならば、次の一節に見て取れる世界は、その精神的部分と連結されるものと言ってよいだろう。巡礼の途上、巡礼達が窓外に眺望した情景の一コマとして、ホーソンは次のような世界を用意する。

ジョン・バニヤンによると、△暗黒の谷▽の出口のところには、△教皇▽と△異教徒▽という残酷な二人の巨人が住みついて、殺害した巡礼達の白骨をあたり一面にばらまいていたという。この隠者の残忍な姿は今では見当たらないが、そのかわりそこには、もう一人別の巨人が居を構え、心優しき旅人をつかまえては、煙、霧、月光、じゃがいも、おが屑などをふんだんに振る舞い、いずれば食卓に、とこれを養っている。この巨人、生まれはドイツで、その名を△巨大なる超越主義者▽という。その一大特徴は、その外見、容貌、実態、性格一般等について、本人自

身を含め、未だ誰一人として語りえていないということである。岩屋の人口を過ぎた時、どこか不格好で、闇夜の霧とでも言うべきその姿が、チラリと目に映った。我々に向かって何やら叫んだようではあったが、聞きなれない言葉であったため、意味も判然とはせず、喜ぶべきか、怖れるべきか、皆目見当もつきかねた。(X、一九七)

この作品は、ポストン近郊コンコードの「旧牧師館」で執筆されたものである。この時期ホーソンは、ここに新婚の居を構えていたが、知られるようにこの家は、旧牧師エマソン(一八〇三—一八二二)の旧居でもあったものである。当時エマソンは既に牧師職を辞し、数年前からは、「超越主義」(トランセンデンタリズム)と呼ばれる最新の知的運動と関り、その中核として活動していたが、その旧居に起居しはじめたホーソンは、自然のなりゆきとして、エマソンを取り巻く一群の超越主義者達と個人的接触をもつことになったのである。巡礼達がまなかに望んだ《巨大なる超越主義者》の姿とは、畢竟、ホーソンを圍繞したこうした現実世界の寓意化されたものに相違ないのである。

しかし、それにしても、ホーソンの言葉は厳しい。ポストンを中心に強力な磁力を発散しはじめたこの運動は、後世からは、「思想家を動かす、政治家を扇動し、モラリストを教導し、博愛主義者を鼓舞し、革命家を養成した」<sup>(2)</sup>と総括された程のものであったが、ごく身近な存在としてこれと対峙したはずのホーソンは、このようには眺めはしない、ホーソンの見るところ、この正体は、「闇夜の霧」に等しいものであり、その主義主張も、「皆目見当もつきかねた」ものなのである。すなわち、この一節に横溢する諧謔と揶揄の口気は、当時の知的風土としての超越主義を、そして、恐らくはその中核としてのエマソンを、ホーソンが否定的に捕捉していたことを十分に証すものなのである。実際ホーソンには、これとは別に、「旧牧師館」(一八四六)と題されたエッセイがあるが、その中

では、エマソンについては、「深遠優美な詩人としては敬服したが、哲学者としては得るところがなかった」(X、三一)とし、またその弟子達については、「自分達のことをこの世を司る運命の代理人と考えているが、実はきき酒にやられているに過ぎない連中」(同前)と、かなり手厳しい言葉を記しているのである。

「天国鉄道」は、かくして虚実の皮膜に遊ぶ作品となるが、しかし、超越主義という知的風土を虚実のあわいに投げ込んだのは、一人ホーソンに限るものでもない。ローウェル(ジェームズ・ラッセル、一八一九—一九一)は当時駆け出しの詩人であったが、この若い詩人が、その諷刺詩『批評家のための寓話』(一八四八)の中で諷刺の対象として槍玉に挙げるのは、やはりエマソンとその一派の者である。

さてエマソンはと言えば(いよいよご当場)

ヤンキーの肩にギリシャ頭を冠と載せ、

オリンポスと株式市場の両極を望む、という次第。

思うにこの男は(こんなことは先刻

お披露目済みのこととは思わうが)

プロテイノスとモンテーニエの掛け合わせ、

黄金のエジプトのもやとガスコニーの冷たい知性、

この両者が煩寄せあったものなのだ。

(中略)

追随者はゴマンというが、

師の叡智と機知には目を向けず、

ひたすら大空のような頭を眺め、ヒラリと

それが空を舞えば、彼らもヒラリと空を切る。

お互い似ているところがあるとすれば、

もやとかすみを浅瀬が映すからに他ならない。

水たまりでも雲を映せば、しばし天と見紛う

深淵と化すのと同断だ。<sup>(3)</sup>

ローウェルが槍玉に挙げるのは、正確に言えば、エマソン一派の者達だけではない。この前後では、クーパーも、アーヴィングも、ポーも、ホーソンも、つまり当時の主だった知識人は、ほぼすべて餌食とされているばかりでなく、ふざけたことには、当のローウェル自身もまた諷刺の対象とされているのである。とはいえ、ローウェルの筆鋒はまことに鋭い。「闇夜の霧」とホーソンが捉えたものを、ローウェルは、「もや」として、「かすみ」として捉え、かつその内質は、ギリシャ的知性とヤンキー的実利主義というおおよそ相反する両極を共存させた、何やら得体の知れないものとして把握するのである。追隨者についても同様である。「きき酒にやられていゝ」とホーソンが捉えたものを、若いローウェルは、外見だけが「深淵」と見える単なる「水たまり」に過ぎないと、これを情容赦なく切つて棄てるのである。

ところで、このローウェルと奇しくも生死の年を重ねるメルヴィル（一八一九—九一）も、超越主義という時代風潮に敏感な嗅覚を働かせた一人である。しかしメルヴィルの場合、その知的環境は、必ずしもホーソンやローウェルのそれと軌を一にしたというものではない。ホーソンやローウェルが象牙の塔という当時のいわば正統的知的環境の下に育まれたとするならば、「捕鯨船が私のイェールであり、ハーバードであった」（Ⅻ、一三九）というメルヴィルは、さしずめ異端的環境の下に育まれたのである。とはいえ、超越主義に対する感知力は、前二者に比して決して劣っていたわけではなく、その痕跡は、残された手紙、作品、あるいは蔵書への書き込みの中に、確実に認められるのである。

## 一

ホーソンとメルヴィルの間には、太い索線を引くことが可能である。コンコードの森の中で、ホーソンが超越主義者を揶揄して

いた頃、メルヴィルは、遙か太平洋の彼方で彷徨の日々を送る身であったが、やがてこの二人は邂逅し、以後二人の間には、若いメルヴィルを主な発信者とする熱い交感が形成されるからである。すなわち、一八五〇年の夏、避暑先のピッツフィールドでホーソンを知ったメルヴィルは、さながら潜熱に煽られるがごとく、熱烈なホーソン讃辞のエッセイ「ホーソンとその苦」（一八五〇）を、一気呵成に書き上げ、明るる年には、完成したばかりの大作『白鯨』（一八五二）を、「天才への讃仰のしるし」として、丁寧にホーソンに献じているのである。

この時期二人の間では幾度か私信が交わされるが、ホーソンに送られた次の一節は、メルヴィルの作家としての成長過程を知る上で、極めて興味あるものである。過去半生の自己の精神的成長について、メルヴィルは次のように述べる。

私が精神的に成長を遂げたのは、ここ数年のことにすぎません。エジプトのピラミッドの中で三千年もの間眠りつづけた植物の種子が、ある日発見され、イギリスへと運ばれ、そこで芽を出し、成長し、朽ちていく——私の成長とは、そんなものなのです。二十五になるまで、成長など少しもしていません。私の人生は二十五才から始まります。それ以来今日まで、二週間もすれば必ず新しい芽吹きがありました。しかしその芽も、今では最後の葉まで吹きだしてしまい、咲いた花も、じきに地に落ちて朽ちるだろうと思います。

この手紙は、『白鯨』完成の直前、メルヴィル三十一才の時に記されたものである。これによると、メルヴィルの人生は二十五才から開始されることになるが、二十五才とは、メルヴィルが海上彷徨から帰還して文筆活動に入った年に他ならないから、その人生とは、つまりはペンを持ち始めてから既に朽ちゆく現在に至るまでの、わずか数年のものであったということになる。

しかしこの数年間は、メルヴィルも認めるように、確かに実り豊

かなものであったのであり、『タイビー』（一八四六）『オム』（一八四七）と順調に船出したメルヴィルは、続く第三作『マーディ』（一八四九）では、海洋冒険譚作家という固定しかけた枠を払拭すべく、意欲的試みに挑戦し、その同じ年には、その不評を埋め合わせるかの如く、『レッドバーン』（一八四九）『ホワイト・ジャケツト』（同前）と、矢継早に書き足し、今また二年がかりの大作を、完成目前にしつつあったのである。ホーソーンとの邂逅は、このような充実多産な日々の中で生じて来たものであったが、メルヴィルにとってこの邂逅は、新しい芽吹きの契機となるものであったに相違なく、先程言及したホーソーン論の中では、「天才とは手に手を取り合うものであり、結ばれたその手には、認識の衝撃が駆け抜けるものだ」（Ⅻ、一三七）と記しているのである。精神的発育盛りとも言うべきメルヴィルにとっては、ホーソーンという存在の発見は、「認識の衝撃」を触発するに足るものであったのである。

メルヴィルにとっての「認識の衝撃」という点では、エマソンの存在の発見も見落とすわけにはいかない。一八四九年、ボストンでたまたまエマソンの講演を聞いたメルヴィルは、以後、その存在に様々な形で反応していくからである。

この年の冬、メルヴィルは、妻の出産に立ち会うべく、ボストンに滞在していたが、滞在中、たまたまエマソンの講演に列席する機会を持ったメルヴィルは、今を時めくエマソンの姿を初めて目撃し、早速、ニューヨークの友、雑誌『文学世界』の編集者ダイキンクに対し、「当地に来て、エマソンの話を聞きました。人が何と言おうと彼は偉大な人物です」と、その印象を書き送っている。

この時メルヴィルがエマソンについて書き送ったのは、わずかこれだけである。だが、ダイキンクからは、即返事が届く。この返事は、残念ながら現存しないが、これに対しメルヴィルは、折り返し返書を認め、先に伝えたエマソン観に対して、更なる敷衍を試みている。いささか長きに失するが、この敷衍の全体像は、是非ここで

捉えておく必要がある。

いいえ、私はエマソンの虹のブランコにはだまされません。他人のブランコに揺られるよりも、自来で自分の首を吊る方がましです。でもエマソンは、なかなかの人物です。たとえその中味が、もらいもの、借りもの、盗んだもの、自分のもの——このどれにせよ、並みの男ではありません。ペテン師としても、ただのペテン師ではありません。トマス・ブラウンがいなければエマソンは神祕家にならずにすんだ、というのはその通りかもしれませんが。しかしこれは、ザツクの父がザツクを生まなければザツクがパロ・アルトの英雄になることはなかった、というのと同断です。要は、私達は誰であれ、先人の子であり、孫であり、甥であり、そのまた子であり、ということですから。自分が自分の父となることは、ありえないことなのです。——ところで、エマソン氏にはがっかりしましたが、半面興味も感じました。氏の本は一度バトナム書店で眺めたことがあるだけで、講演を聞くまで知っていたことは、超越主義やら、作話やら、意味不明のおしゃべりやらで一杯の人だ、ということくらいでしたが、びつくりしたことに話は結構分かりやすかったのです。もつとも、この日は特に分かりやすかった、という人もいます。

——とはいえ、月並みでない人間には、何となくわかる何かがあるものです。エマソン氏にはこれがあります。話の都合上あり体に申しますならば、エマソン氏がかりに馬鹿者だとすれば、私もまた賢人と呼ばれるよりは愚者と呼ばれるたい、ということですから。私は深く潜る人はみんな好きです。水面近くを泳ぐことはどんな小魚でもできませんが、五マイルも、それ以上も潜るためには、大きな鯨でなければなりません。底には辿りつけなくてもいいのです。ガレナの鉛を全部集めても、そんな重しを作ることはできないのですから。私は何もエマソン氏のことを言っているわけではありません。水中に潜っては赤い眼をして浮上してくる、昔からいる幾多の思想上の潜水夫のことを言っているのです。

直にわかったことですが、エマソンには、いいところもありますが、致命的な欠陥もあります。内緒の話ですが、この世の始めのころに生まれていたら何か価値ある言葉を吐けたらどう、ということですから。こ

う連中はみんな頭がおかしいのです。それに、破壊を事とする者は、どうやっても創造者に対抗できるはずはなく、壊すのは実に簡単なことなのです。ブロック記念碑は火薬一樽で吹っ飛びましたが、悪魔に喰われるのが怖いからといってこれを造り直そうとしても、マッチを擦った男一人だけではどうにもなるものではありません。いずれにせよ、鼻声で語るプラトンにはうんざりです。(中略)もう少し書こうと思っていたのですが、一言だけ付け加えさせて下さい。——エマソンは菓子パンの国に住む人間だから、粗末なケーキを仲間とかじったり、ビールで仲間と乾杯というわけにはいかない、あなたはこうおっしゃいました。でもこれは、彼の運が悪かったということで、彼の落度というわけではありません。彼の場合、胃袋はおそらく胸のところにあり、頭は首の中へとめり込んでいるので、ビールを飲んだり、ケーキをかじったりするのは、邪魔になるのです。でも、私はそうではありません。では、これで、

三才年下のメルヴィルの手紙に対し、ダイキンクがどのような内容の返事を送ったのか、正確なところはわからない。しかし、残されたメルヴィルの手紙からそれを推測することは可能である。この場合、「いいえ、私はエマソンの虹のプラトンにはだまされません」という冒頭の言葉から判断すると、ダイキンクのそれは、最初にメルヴィルが書き送ったエマソン観を、おそらくたしなめる類のものであったろうと考えられる。

シールツが詳細に調べたところによると、「エマソンの虹」という言葉は、この年のニューヨーク・トリビューン紙(二月六日号)に見られるものであり、ダイキンクは、おそらくこれを切り抜きとしてメルヴィルのもとへ送ったのだという。このコラムとは、エマソンを称えるポストン・ポスト紙の記事(その中に「彼は虹を逆立ちさせてブランコとし、地球を横目に宇宙を飛び、星空の間で手をたたく」という表現がある)を軽く皮肉った絵入りのものであるというが、なるほどこのポスト紙とはほぼ同様のエマソン観を書き送ってきたメルヴィルに対し、ダイキンクは、ニューヨーク人としての

多少のプライドを込めつつ、この批判記事を同封したのかもしれない。前記の手紙は、確かにこれに対する弁明の響きを漂わせているのである。

ところで、文面から判断すると、講演を聞くまでのメルヴィルは、エマソンに対し、あるいはさほど深い関心は抱いていなかったのかもしれない。エマソンの著書は「パトナム書店で一度眺めたことがあるだけ」だったからである。だが、にもかかわらず、エマソンに対するメルヴィルのこの反応は、かなりの密度をもったものである。エマソンを語る口吻にも、何やら高揚した気配すら感じられる。この気配は、メルヴィルにとってのエマソン体験が、一種の「認識の衝撃」であったことを示唆するのに十分なものである。

だが、ここに見られるエマソン観は、必ずしも単純明快なものではない。一方でメルヴィルは、激しくエマソンを肯定する。「並みの男」ではないことを繰り返して断言し、「深く潜る人はみんな好きです」と、憧憬の眼差を向けもする。他方、その欠陥を認めるにも、少しもやぶさかではない。「鼻声で語るプラトン」ぶりには実際辟易すると正直に告白し、酒食の席で胸襟を開きあうような人物ではない、ともいう。つまりメルヴィルは、知への傾斜が過ぎて現実を遊離した嫌いのあるエマソンの弱みを、ダイキンクと共犯的に、ユーモアたっぷりに剔出してみせるのである。

このようなエマソン観は、つまりは両義的なものと言うべきなのかもしれない。メルヴィルの描くエマソンは、肯定と否定の両極を激しく揺れ動くものなのである。しかし、この両義性は、どこまでも「エマソン観」のそれであって、必ずしも「超越主義観」のそれとは言い難いものである。メルヴィルの関心は、主にエマソンの人となりに向けられているようであり、その思想の内質に関しては、さほど徹しい探りを入れてとは思われないのである。しかし、もちろん全くの無関心というわけでもない。エマソンという人物が「超越主義やら、作り話やら、意味不明のおしゃべりやら」で特徴

づけられる存在であることを、メルヴィルは重々承知しているものであり、その上エマソンが「思想上の潜水夫」であることも、既に十分了解しているのである。とはいえ、エマソンとのこの出会いは、かなりの「認識の衝撃」ではあつたらしく、以後メルヴィルの知的活動の中に、長くその痕跡を止めることになるのである。

## 二

エマソン、あるいは超越主義に対するメルヴィルの関心が、いつの頃からその意識の内に芽生えていたのか、これは必ずしも判然とはしない。しかし、その影が臍気ながらも感知されるのは、おそらく第三作『マーディ』をもつて嚆矢とする。ここには、それらしき要素が多少とも認められるからである。しかし、ボストンでのエマソン体験が、この作品の創造に直接影響を及ぼしたとは考えられない。メルヴィルが講演に列席した時点では、この作品はすでに校正済みとなっているからである。だが、エマソンの色彩は作中確かに認められるのである。

この時期エマソンは、既に数冊の書物を世に出している。『自然』(一八三六)、『随想、第一集』(一八四一)、『随想、第二集』(一八四四)、『詩集』(一八四六)等である。シールツの調査によると、先程の手紙の言葉にも拘らず、メルヴィルはこれらの書物のすべてに既に接していた可能性もあるというが、<sup>10)</sup> 事實はどうあれ、ここにみられるエマソンの世界——宗教的、哲学的背景をもつた極めて観念性の高い世界——は、『マーディ』にもまた認められるのである。特にその後半部では、登場人物の一人である哲学者バツバランジャを核にして、しばしば哲学的対話の世界が提示されるのであり、そこで論じられる話題の宗教的、哲学的含みを持つ観念性もさりながら、その世界には、何やら「鼻声で語るプラトン」の響きも感知されるのである。例えばエマソンは、「わたしは透明な一個の眼球

になる。無となつてすべてを見る。普遍的存在が体内を流れ、完璧に神の一部となる」(I、一〇)と『自然』の中で述べているが、「自然」とのこの神秘的合一感<sup>11)</sup>は、哲学者バツバランジャの視点とも無縁のものではない。バツバランジャによれば、例えば「詩」の中には、「魂の深層に打ち込んでくるもの、最後には物自体に集中し、その本質に突き当たり、その浸透的根源と融合し、一体となるもの、一切を抱擁する神的なものと同質になるもの、かくして我々人間が完璧に神の一部となるもの」(IV、二八一)が潜んでいるのである。しかもこの人物は、「私の矛盾の総和が私の首尾一貫性をなす」(同、一六〇)という視座を持つが、「多様の中の統一」(I、四二)を認めるという視点が、エマソンの視点の特徴の一つであることは、知られる通りなのである。

とはいえ、この類似性は、単に偶発的なものである可能性もある。作中にはエマソンに対する明確な言及は見当たらないし、その上この種の視座は、シールツも指摘する通り、何もエマソン個有のものであつたわけではなく、古くはプラトンから、新しくはワーズワース、コールリッジに至るまで認められるものであり、メルヴィルがこれを葉籠中のものとしていた可能性は、十分考えられるのである。

『マーディ』中のエマソン性とは、およそ以上のようなものに過ぎないが、しかし、第五作『ホワイト・ジャケット』では、事情は多少とも異なる。この作品は、エマソンの講演の約半年後に執筆されたものであるが、その数ヶ月前に慌ただしく執筆上梓された第四作『レッドバーン』が、ほとんどエマソンの色彩を感知させないのに対し、この第五作には、例えば次のような一節が見出されるのである。ここに描き出される牧師の姿は、何やらエマソンのそれを連想させはしないであろうか。

われわれの巡洋艦にも日曜日があり、牧師も乗っていた。この牧師、瘦せた中年の男で、申し分のない応待をする好人物であつた。しかしそ

の説教は、乗組員にはあまり役立つものではなかった。プラトンの泉のおかしな水を飲みすぎており、ドイツ人のせいで頭もおかしくなっていた。コールリッジの『文学的自叙伝』を手にかけているのを、ホワイト・ジャケットがみたこともあった。

さて、この超越主義的牧師が正甲板の砲架の後に立ち、五百人もの罪深い海の男達に向かって、魂の心理学的現象やこれを確実に救済するための存在論的必然性について、滔々と述べ立てている様子を想像してみたい。いにしえの哲学者の愚論の数々について語り、プラトンの『パイドン』について述べ、異教の賢人シンプリウスの『アリストテレス「靈魂論」注解』の愚かさを、慣れのテルトリアヌスの「異端者反駁」論を引き合いて暴き出し、最後はサンスクリットの祈りの言葉で締め括ったのだ。二世紀のグノーシス教徒やマニ教徒に対してはとりわけきつい言葉を並べたが、軍艦上に頭者に認められる十八世紀の日常的悪徳に対しては、いささかも攻撃の矢を放つことはなかったのだ。(VI、一九四)

プラトンの泉に酔い、ドイツの影響を受け、コールリッジの本を手にするこの超越主義的牧師に、メルヴィルが眺めたエマソンの姿を想像するのは、さほど無理な連想とは思われない。当時四十半ばのエマソンの風貌が人受けのする穏やかなものであったことは、残された肖像からも十分見て取れるものであり、かつその講演の内容が、この牧師の説教と同様、現実離れをした「鼻声で語るプラトン」的なものであったことは、メルヴィルの手紙が十分に語っている通りなのである。とはいえ、この類似性は、これ以上でもなければ以下でもない。引用したこの場面は、虚構として構築された艦上風景の一コマに過ぎないのであり、旧牧師エマソンが軍艦に乗り込み牧師を務めたという事実はどこにもないのである。

しかし、虚の世界の中に実の世界の一端が、それもエマソンと関りをもつと思われるそれが覗くというこのような例は、以後メルヴィルの作品の中で次第にその数を増すことになる。『ホワイト・ジャケット』の執筆後、イギリスへの旅を狭んで、第六作『白鯨』が執

筆されるが、精神を傾けたこの畢生の大作も、もちろんその例外ではない。ハワードの分析によると、この作品は、既に主題自体がエマソンの、超越主義的であるという。

メルヴィルの作品の「隠された」意味は、物理的なものを精神の表象とする超越主義的認識論を、ある人が認めるならば、その人は破滅する、というものである。しかしメルヴィルは、必ずしもそう確信していたわけではない。超越主義的英雄としてのエイハブは、カーライルが「永遠の否定」と呼んだところの目下反抗中という段階の人物であり、このようなものとしてのエイハブは、『衣裳の哲学』の主人公が到達し、エマソンがアメリカの読者の前に繰り返し提示していたあの精神的善を最終的に見て取る視点を、未だ達成してはいないのである。つまりエイハブは、不完全な超越主義者なのであるが、にも拘らずメルヴィルは、その彼に共感を抱いているのである。

ハワードの分析は、『白鯨』が当時の知的風土の中で占めた位置を、かなり明瞭に示すものである。メルヴィルはこの作品を「冒険ロマンス」と呼んではいたが、<sup>(15)</sup>『白鯨』は、単なる冒険ロマンスであったわけではない。七つの海を股に掛けて巨大な白鯨を追跡するという結構そのものは、確かに血沸き肉踊る物語りのそれである。だが、同時にこの作品は、極めて奥行きが深い、知的ロマンスでもあるのであり、そのことは、例えば冒頭に配された「語源部」「文献部」を一瞥するならば、十分に推察しうるものなのである。すなわち、ここに配された世界とは、ほぼ原初から現代に至るまでの、壮大な知的伝統の世界なのである。

ところでエマソンは、ハワードの言うように、「物理的なものを精神の表象とする超越主義的認識論」を、確かに提示した。例えば『自然』の中では、「自然は精神の象徴である」(I、五二)と記しているのである。ところがこうした視座は、実は『白鯨』にもまた散在するものであり、例えば語り手イシヌマイルは、「あらゆるもの

には何かの意味が潜んでいる(Ⅷ、一八八)という観点で世界を眺めるのであり、エイハブはエイハブで、「お、お、自然よ、お、人間の魂よ。この二人を結ぶ絆は何と深いことか。」(同、三八)とこの世を捉えるのである。つまりイシュメイルやエイハブにとっては、自然界のあらゆるものは、人間の魂と何らかの関りを持つつつ、かつ何らかの意味を内在させたものとして存在しているのである。これは、エマソンの視座とかなり接近したものと云わねばならない。『白鯨』執筆時、メルヴィルは、エマソン等超越主義者に大きな影響を与えたとされるカーライル、ゲーテ、コールリッジ等の書物と親しんでいたとされるが、いづれにしろ『白鯨』中に、超越主義的視点を持つ人物が登場してくることは確かなのである。このことはメルヴィルが当時の時代精神に鋭敏な嗅覚を働かせていたこと十分な証でもある筈である。

ところで、時代精神に対するこの嗅覚は、次作『ピエール』(一八五二)では、更に激しく作動する。

『ピエール』は、ニューイングランドに生を享けたさる若者の、青春の蹉跎を描く悲劇的ロマンスである。と同時にこれは、哲学的小説でもある。主人公は形而上的臆想にしばしば耽り、作中には哲学的論文の断片も挿入され、更には、「未成熟のさる超越主義哲学」(Ⅸ、三九〇)の信奉者も作中に出没する。その上、どう見てもエマソンを念頭に置いたとしか思われない言葉も、作中に姿を見せる。語り手は、この世に遍在する惨めなるものを、悲しくも一片の美としてしか見る目を持たない者達について、「お、償い派、別名お楽観派、のお目出度い哲学者ども」(Ⅸ、三八五)と記しているのである。超越主義運動の主義・主張が一般に楽観的とされること、エマソンのエッセイに「償い」(Ⅱ、九一―一二七)と題されたものがあることは、周知の通りである。

次に挙げる一筋も、超越主義に対する作者メルヴィルの関心の深さを十分に示すものである。若い作家である主人公の生計について

語り始めた語り手は、やゝ脱線気味に、次のようなことを述べる。

この世の生業を見ると、すでにものを持てる者はますますものを手に入れ、哀れにも持たざる者は、持てるものをも奪われるというのが実状である。だが世間の人は、この世は何事も事務的に進行する単純明快にかつ滋味あふれるものだという。つまり、この世の支配原理は単純なものであり、そこでは、曖昧なもの、超越的なもの、詐欺的なものは、問題にもならない、という。そこで、想像力に恵まれた異端の者は、常識的な視点を敢えて逆転させ、三は四である、三たす二は十である、とか、この世を全く馬鹿にした超越的言辭を口にして、しばしばひどく軽蔑されている。しかし、世間が現実かつ永遠に実行し、しかも現実感覚からしても少しもおかしくも危険でもない教理、すなわち、十分にもてるものには更にと与え、持たざるものからは持てるものさえ奪いとるといふものを、かの高名なジャグラーリウスも提唱したとすれば、この世で最も真なる書物も、偽せ物であるということになる。

であるから、いわゆる超越主義者は、超越的なものを扱う唯一の人物であるということにはならない。それどころか、日常の世界に住む功利主義者の方が、不可解な金言を信じるという点で、お粗末な超越主義者よりも遙かに超越的である。しかも、同じく超越的とはいっても、一方にとつてのそれは行動とは関係のない理論上のことで、従つて害もないものであるが、他方にとつてのそれは、生身の行動を伴うものである。(Ⅸ、三六四―五)

メルヴィルの作品には、言葉や論理を弄ぶ戯れ言的文章が、しばしば顔を見せる。この一節も、おそらくその例外ではない。語り手の当初の目標は、この世を支配する苛酷な経済原理について述べることにあると思われるが、いつの間にかそれは、「超越的」なものについての諷刺的意見の開陳へと、すり替えられてしまふのである。つまり、主人公の生計の維持の仕方とこの世の資本主義的経済原理との関り具合という、筋の展開の上から見ても重要であるべき問題は、いつの間にか傍へと押しやられ、代りにこの語り手は、世間一



般の人の物の見方や、知的活動に従事する人のそれに対して、やゝ詭弁に墮した感のある私見をさし挟み、世間の人は「超越的」というものを、「曖昧さ」や「詐欺」といったものと同義としているが、そのように眺める功利主義的な世間の人の方が、「超越主義者」よりも実は遙かに「超越的」である、とするのである。

こう述べる語り手は、「超越主義者」を一見擁護しているかに見える。しかし、正確に言えば、そうではない。何故ならば、世間一般の人間についてこのように述べる語り手は、同時に、世間には「お粗末な超越主義者」が存在すること、そして彼らの「超越」性とは、「行動とは関係のない理論上のこと」で、従って害もないものであることを、明確に弁じているからである。これは、どうみても「超越主義者」への讃辞の言葉とは思われない。

これを裏付けるかのように、「超越主義者」は、作中他の箇所では、更に痛烈に罵倒される。この世を説明し尽くすような護符的奥義などありうる筈がない、という視点に立つ語り手は、それをあるとする哲学者など皆ベテン師に過ぎないのだ、と断じた上で、「プラトン、スピノザ、ゲーテ、その他大勢は、すべて自己欺瞞の徒であり、マグルトン派のスコットランド人も、ヤンキーどもも、すべて下司の集団であり、ギリシャやドイツの新プラトン主義の元祖たちの石頭を、地で行くものに他ならないのだ」(Ⅸ、二九〇)と、この世の著名な哲学者を、当たるを幸い、片っ端からなで切りするのである。もちろん、ここに言う「ヤンキーども」とは、つまりは「超越主義者」を指すものに相違ないものである。

ところで、『ピエール』の場合、語り手と主人公とは、極めて接近した関係に立つ存在である。すなわちこの語り手は、語っている対象である筈の主人公と、しばしば一体化してしまっている存在であり、従って、この糾弾の言葉も、実は主人公の言葉と言ってもよいものなのであるが、実際この主人公の場合、哲学者に対する憎悪の念はかなりのものであるらしく、作中作家として、創作中の作品の主人公

(ヴィヴィア)に、次のような言葉を吐かせているのである。

失意と絶望とが幾重ものとなりとなって、この俺を包んでいる。去れ、嘴の青いスピノザ、そしてプラトンよ。もう少しでこの俺は、夜は昼、苦は楽などと、騙されるところだった。この闇を説明し、悪魔を追い払うことなど、貴様にはできないことなのだ。給仕人のように忠実な私がいなければこの世は立ち行かない、などとほざいてくれるな。貴様などいなくても、この世はちゃんと動いていくし、貴様のようなやつは、他にもゴマンといるのだ。集団には魂はないだろ？ だったら、貴様の汎神論は一体何だ。貴様も、うぬぼれの強い冷酷な人間の一人ではないのか。見ろ、俺はこの手に貴様をひつつかみ、中味のぬけた卵のように、貴様を握り潰してやるわ。(Ⅸ、四二二—二)

確かにこれは激しい言葉であり、飽くなき罵詈雑言であるが、かくして作品『ピエール』は、したり顔の哲学者に対する敵しい指弾の視線で求心的に貫徹されることになる。すなわち『ピエール』においては、「超越主義者」を包含する一群の哲学者は、語り手から主人公へ、その主人公から、更にその語る主人公へと、言わば求心的に憎悪の視線に晒されることになるのである。

だが、この憎悪の視線を即メルヴィルのそれと同一視するのは、もちろん危険な類推と言わねばならない。『ピエール』の副題は「曖昧なるもの」であるが、実際曖昧性は作中に溢れているのであり、この呪縛からは、対超越主義者観といえども、完全には自由になりえていないのである。作品の結尾で、主人公ピエールの悲劇的結末を無念の思いで見守るのは、他ならない超越主義哲学の信奉者ミルソープなのである。曖昧さは、ここにも作動しているのである。

### 三

しかし、『白鯨』の後を襲った『ピエール』は、失敗作の烙印を

押され、大衆からも、ほぼ完全に無視されることになる。しかし、この敵しい受け止め方は、ある程度止むを得ないものであったのかもしれない。メルヴィルはこの作品を大衆向けロマンスとして意図していたが、<sup>(18)</sup> 婦女子の贈答用にも適する大衆小説であるためには、これは、あまりにも知的、哲学的でありすぎたし、倫理的にも、必ずしも好ましいものではなかったのである。すなわち作中には、当時としてはタブーであるべき近親相姦のテーマも、明らかに認められたのである。

かくしてメルヴィルは、以後数年間、失意のうちに、ひっそりとして中・短篇の創作に従事することになる。だが、こうして生み出された作品のいくつかには、おのれを取り巻く知的環境に対するメルヴィルの反応が、やはり看取されるのである。『ビエール』の翌年に発表された二つの短篇「書記バートルビィ」(一八五三)と「コケッココーノ、あるいは、高貴なる雄鶏ベネヴェンターノのときの声」(同)は、いずれもこうした見方を可能にするものである。

「書記バートルビィ」は、ニューヨークのさる法律事務所にある日出現した若者バートルビィの、生の有り様を語るものであるが、この若者は、ひどく超越的な存在である。雇われて三日目、奇妙にも窓際の壁と沈黙の対峙を始めた彼は、以後上司の命令をすべて拒否する。書類の点検も、使い走りも、辞職の勧告も、転職の幹旋も、すべてこれを拒否し、あまつさえ、収容された刑務所では、食することさえ拒絶する。そして、壁に向っての沈黙の対峙のまま、無言のうちに息絶える。この奇妙な若者に対し、語り手である「私」(雇主)は、「あゝ、バートルビィよ。あゝ、人間よ」(X、六五)という意味深長は言葉を送ることになるが、若者の生の有り様の超越性を思う時、この言葉は、「あゝ、超越主義者よ」といったものであってもさほど不自然とは思われないのである。「書記バートルビィ」はエマソンのエッセイ「超越主義者」(一八四二)に基づくとする論があるが、<sup>(19)</sup> その真偽はともかく、若者の生き様は、確かに、俗界を遊

離した存在としての超越主義者のイメージを容易に想起させるのである。

超越的な生の有り様を意味深長に描くという点では、「コケッココーノ」(略記)もこれに劣るものではない。この場合超越的生を生きるのは、廃屋のような粗末な家に住み、一羽の雄鶏を珍重するメリマスキ一家の者であるが、近代文明の象徴ともいえる鉄道に隣接して住む彼等は、いかにもその超脱ぶりを暗示するかのようになり、日々その雄姿を晒す汽車には少しも目をくれない。特に病弱の母子は、今にも息絶えんとする末期の床にあって、高らかにときの声をあげ雄鶏の雄姿に、さながら神の化身を崇めるがごとく、神々しいまでの思いを寄せる。ときの声に誘われて、その正体の究明に乗り出した「私」(語り手)は、たまたまこの一家の姿を目撃することになるが、「私」により目撃されたこの生の有り様は、超越的であるという点において、バートルビィのそれを容易に想起させるものである。その上、この一家の長である人物は、「木こり」を業とする「メリマスキ」とされているが、その職業といい、名前といい、これは、超越主義者エマソンの愛弟子ソーロー(一八一七—六二)を連想させるものなのである。すなわち、『森の生活』(一八五四)の著者ソーローが、ウォールデン湖畔で現実に森の生活を体験していること、またその著書に『メリマック川での一週間』(一八四九)があることは、知られる通りであり、とすれば、雄鶏対メリマスキという関係の中に、エマソン対ソーローという図式を察知することも、さほど奇抜な反応とも思われないのである。<sup>(20)</sup>

しかし、師エマソンと弟子ソーローという図式が、更に明確に認められるのは、メルヴィル最後の長篇『詐欺師』(一八五七)である。この後半部で、メルヴィルは、いかにもエマソンとソーローとを彷彿とさせる人物を登場させる。すなわち、ミンシッピーの川面を下る蒸気船上で、次々と乗客を欺いていく詐欺師の前に現れた二人の人物、哲学者マーク・ウィンサムと、その弟子エグバードは、思想

的に師弟の關係にあるばかりでなく、前者がサクソン風の容貌をした四十代半ばの「神秘主義者」(Ⅻ、二五〇)であるとするとするならば、後者は、三十がらみの「超越主義哲学の徒」(二六五)であり、「実生活よりも書齋向きのマーク・ウィンサム」の哲学を、この世で初めて実行に移した男」(二六二)とされているのである。師の容貌、弟子の生き様、二人の年令關係、そしてその哲学——これらは、いずれもエマソン、ソーローのその焼き直しなのである。

ところで、二人を眺める作者の視点は、かなり辛辣なものである。哲学者ウィンサムを紹介する際のような口上は、その一端を示すものである。

この男の特徴は、何やら得体の知れない抜け目なさや神秘性が、奇妙に混在していることであつた。ある意味では、物売りヤンキーとトルコ坊主との掛け合わせのようでもあつた。もつとも、せつば詰つた時などは、ヤンキー魂がやはりムクムクと頭を拾げてくるようではあつたが。(二五〇)

先に見たように、詩人ローウェルは、超越主義者エマソンを、「オリンポスと株式市場」の両極に目を向けるものとして痛烈に揶揄した。ここに見られるウィンサム観も、奇妙にこのローウェルの言葉を想起させるものである。「抜け目なさや神秘性」「物売りヤンキーとトルコ坊主」とを共存させるウィンサムは、ローウェル描くところのエマソン像と、どう見ても二重映しなのである。

ところがこのウィンサムは、同時に、メルヴィル描くところのエマソン像の焼き直しでもある。「鼻声で語るプラトン」とは、若いメルヴィルが捉えたエマソンの姿でもあつたが、ウィンサムが身につけた「神秘性」も、何やら意味不明の高邁なギリシヤ語を練ることであるらしいのである。その模様は、詐欺師との対話を記す次の一節に、十分明らかだろう。

「思うに彼は、古代エジプトでは……と呼ばれた男なのさ」と、彼は何やら意味不明の言葉を口にした。  
「……ですって。何ですか、それは。」  
「……とは、プロクルスがプラトン神学を論じた三番目の本の目立たない注の中で……と定義してるやつさ」と、ギリシヤ語の文章を口にした。(二六五)

エマソンに見立てての揶揄としては、おそらくこれだけでも十分である。だが、実際にはこれは更に執拗を極める。エマソンの視点の中に「多様の中の統一」(Ⅰ、四三)をよしとするそれがあることは先述したが、矛盾や非一貫性をも肯定すると解釈しうるエマソンのこの視座を皮肉るように、詐欺師は、ウィンサムの論理に潜む矛盾、非一貫性を、読者の前に容赦なく暴き出すのである。すなわち、詐欺師は、ウィンサムの論理が「一貫していないのではないか」(二五五)と問うことにより、ウィンサムの口から「私は一貫性など気にはしない」(同)という答を引き出し、更に、ウィンサムが繰り広げた自己弁護の論理——陸から眺めた運河は場所により高低があるが、そこを走る船にとっては、水平線は常に一貫した高さにあるのだ(二五六)というもの——に対しては、痛烈にも、「運河の中で揺られてばかりいて、一体君は、大地に立つことができるのか」(同)と応じるのである。詐欺師のこの姿勢は、一貫性に対するウィンサムの意識の甘さを指摘するものであると同時に、その論理の、「大地」を遊離した脆弱性を剔出するものでもあるだろう。

ウィンサムをエマソンとするならば、ここにおけるエマソンは、その弱点を、詐欺師により、完膚なきまでに暴かれていたといった趣なのである。

いま一つ例を挙げる。「金を貸してくれ」と申し出た詐欺師に対し、ウィンサムの忠実な弟子エグバートは、次のような理由でこれを拒否する。

私は、困った時は兄弟よりも見知らぬ他人、と言ったソロモンほどケチな考えはしてはいない。しかし、神聖なる我が師が『友情論』の中で言っていること——世俗的便宜を求める場合は、天国的な友（社会的かつ知的な友）は求めない。いや、世俗的便宜のためには、世俗的な友（うだつのあがらぬ商売仲間）をこそ求める——これには、全面的に賛成だ。（二七一）

エグバートの拒否の論理は、師ウィンサム『友情論』を梃子にして、友の申し出を「世俗的便宜」、自分の存在を「天国的な友」と規定することである。だが、海千山千の稀代の詐欺師が、エグバートのこの手前勝手な論理に素直に同意する筈はない。「私は君を天国的な友とは思っていない」（二七一）、とすかさず反論するのである。詐欺師を前にすると、さすがにエグバートの論理も形無しであるが、ところで、エグバートが拠って立つウィンサムの著書『友情論』と、奇しくもその題名を同じくするエッセイ『友情論』（Ⅱ、一八九—二一七）がエマソンにあることは、周知の通りである。とすれば、詐欺師のこの切り返しは、間接的には、他ならないエマソンへの切り返しとも考えられるのである。

このように見てくると、ウィンサム、エグバートに対する詐欺師の視点は、現実的含みを持つ極めて辛辣なものであることが判明するが、最終的に吐き出される次のような言葉は、この辛辣さを十分に集約するものだろう。御託を並べるばかりで一向に要領を得ないエグバートに対し、業を煮やした詐欺師は、おそらくはエマソン、ソーローを念頭に置きながら、次のように吐き捨てるのである。

もう結構だ。マーク・ウィンサムの哲学の有難さは、もう十分にわかった。理論的には影が薄いが、やっていることを見ると、結構現実的なものようだ。この世の習いを身につけるには私の哲学を学ぶ方がいいな。どこの男は抜かしたが、自分の体系の健全さを弁明するためのこんな

言葉を真実だと信じ込みでもしたら、恥づかしくて人にも会えなくなる。弟子も、弟子だ。頭の中が、心の奥の氷で冷えきっているのなら、眉をしかめて命がけでランプの火を灯しても、無駄なことではないのか。ご立派な先生が教えてくれたことなど、どんな老人でも、言おうと思えば言えたことなのだ。もう、ほっといてくれ。非人間的哲学など、きれいさっぱり持ち帰ってくれ。金は私の方でくれてやる。船着場についたら、薪でも買ったまえ。あんたらの氷のような冷たさを、少しでも暖めるため。（二九七）

かくしてメルヴィルは、エマソンを念頭に置いたと思われる超越主義者ウィンサムの哲学を、「理論的には影が薄」く、「氷のような冷たさ」を内在させた、「非人間的哲学」と、総括することになる。もちろんこの総括は、基本的には、作中人物詐欺師のそれに他ならないが、しかし、詐欺師をめぐる虚の世界の中に、メルヴィルをめぐる実の世界を投げ込んだのは、やはり作者メルヴィルに他ならないのである。

だが、『詐欺師』出版を契機として、メルヴィルは散文の筆を擱く。文学者として世に出ることを断念し、税関勤務の傍、己の無聊をかこつたように、黙々と詩作に没頭する。そして、『詐欺師』に遅れること二十年、一八七六年には、かつての聖地巡礼の旅を素材として、一万八千余行からなる長大な叙事詩『クラレル』を完成する。しかし、これらの詩の世界には、かつて見られたような超越主義への反応は、少くとも具体的な形ではもはや見当たらない。ほとんど唯一の例外は、『クラレル』の登場人物の一人、南北戦争の敗残將校であるベンジミスト、アンガリーの言葉であるが、キリスト教社会の衰退と墮落を指弾する彼は、その中で、こう述べる。<sup>(22)</sup>

キリスト教徒の踏むべき道を、大きく逸脱するものもある。この者たちは、神の名を挙げるのを固く拒み、

口に出るのはギリシャ人のことばかり、  
彼らこそ英雄、大主領というわけで、  
気取りようといったら、プラトン並みだ。

▲悪の認知はどこ吹く風、  
怪しげな天使の翼を羽ばたかせ、  
深淵の水面をかすめ飛ぶだけだ。(XV、二四四―五)

ペンミスト・アンガールの痛憤の対象は、キリスト教徒の道を踏外した当今の一群の者達であるが、この異端の輩の輪郭は、メルヴィルの世界では、既に馴染みのものである。すなわちアンガーが糾弾するのは、『ビエール』や『詐欺師』に見られたように、あるいは手紙の中にも認められたように、「▲悪」の認知の欠落した、「プラトン並み」の気取りようを持つ、「天使」的人物なのである。これを見る限り、『クラレル』におけるメルヴィルには、歳月の変貌は少しも感じられない。

とはいえ、超越主義、あるいはエマソン、に対する作品中での言及は、これを最後に途絶えることになる。『クラレル』以降の作品としては、死後出版の遺稿『ビリー・バッド』(一九二四)があるが、ここには、これへの言及は見当たらない。「悪」と「無垢」の相剋という構図は骨太に描き込まれてはいるものの、ここに超越主義やエマソンへの反応を明確に見取るには、この作品は、あまりにも象徴化され、昇華され過ぎているのである。実の世界を虚の世界にもろに投げ込むには、この時期のメルヴィルは、それこそ実の世界を、既に十分に超越しきっていたのかもしれない。

#### 四

ところで、エマソンに対する反応を知る手掛かりが、作品とは別に、いま一つある。エマソンの著作に対するメルヴィルの書き込みである。<sup>(23)</sup>

書き込みが認められるのは、メルヴィルが所持していた三冊のエマソンの著書、『随想、第一集』(一八四一)、『随想、第二集』(一八四四)、そして『人生論』(一八六〇)である。メルヴィルがこれを購入したのは、前二者が一八六二年、『人生論』が一八七〇年であるというから、書き込みは、いづれも『詐欺師』(一八五七)以降になされたものであることがわかる。この時期、超越主義に対する反応は、先述した通り、作品中では稀薄であるのだが、その意味ではこれは、この空白の期間を埋めるものとして興味あるものである。書き込みの数は、マークだけのものも含め、わずか三十に満たないものである。だが、示唆に富むという点では、いづれも貴重なものである。

エマソンの言葉を辿るメルヴィルは、時に激しく共感し、時に激しく反発する。例えば「精神の法則」(『随想、第一集』)では、

我々は、常に見えるものから見えないものを類推する。古代の賢人に完全な知性が宿っているのは、そのためである。書物の底に言葉の意味をどれほど閉じ込めようと、炯眼な人物が、いつかはそれを暴き出すものだ。(II、一四六)

というエマソンの言葉に対し、メルヴィルは、「でかした、エマソン! その通り」(三二〇)と、諸手を挙げて、大仰な讃辞を呈している。しかし、これとは逆に、同じ書の別のエッセイ「思慮分別」(同前)においては、

嵐でびくつくのは、大抵、船室内でのんびりしている輩である。馬喰や船乗りは、終日嵐の中においても平氣の平左、たとえみぞれに打たれても、脈拍は真夏と少しも変らないものだ。(II、二三七)

というエマソンに対し、メルヴィルは、「嵐のホーン岬を下級船員として廻った者から見ると、これは一体何事だ」(三二九)と、

激しい不満の意を表明しているのである。

メルヴィルの反応は、全般的に振幅が大きい。上記の例もその例外ではないが、その振幅の中で目立つものの一つは、エマソンの「気高さ」を認知する視点である。例えば「詩人論」(『随想、第二集』)の中には、「詩人とは一種の解放の神である」(Ⅲ、三〇)とする主旨の一節があるが、これに対するメルヴィルの感想は、「これは気高い言葉であり、気高い思考、偉大なるものへの自然な共感から生じるものである」(三二一)というものである。エマソンへの共感、疑うべくもない。

しかし、「気高さ」を認知する一方で、その主義・主張に反発を示す場合もある。一例を挙げると、同じく「詩人論」の中で、エマソンは、詩人や芸術家がしばしば放恣な生活に墮しがちであることに關して、こう述べる。

神酒を授かる少数の者を除き、画家、詩人、音楽家、俳優といった、いわゆる《美》の表現を職とする者の多くは、かくして、快樂と放縱の生活に陥りやすいのである。しかしこの生活は、自由を得る方法としては誤ったものであり、またそうして解放感を味わったとしても、それが向かうのは、天国というよりも下劣なる世界であり、つまりはそのために罰を受け、放蕩墮落の生を送ることになるのである。(Ⅲ、二八)

エマソンの言葉は、いかにも旧牧師のそれであり、優等生的なものであるが、これに対するメルヴィルの感想は、こうである。

ちがう。ちがう。タイタンは墮落したというのか。パイロンは彼もそうだというのか。エマソン氏の見解は、この点偏狹を窮める。氏のマルモラ海には、常にダーダネルス海峡が控えているのだ。とはいえ、やはり気高い口調ではある。(三二二)

「気高さ」に關する限り、メルヴィルは極めて寛大である。旧牧

師というエマソンの人柄を現すかの口調、思考方法に対しては、明らかに一目置くといった風情である。しかしメルヴィルは、一点においてエマソンと妥協できない。その、あまりにも牧師的な、決めつけた、「偏狹」な割り切り方に対してである。この点メルヴィルは、どうしても我慢がならない。

「偏狹」性に対するこの非寛容さは、あるいはメルヴィル自身芸術家の一人として同じ《美》の追求者であるのだ、という自負の念によりもたらされたものであるのかもしれない。たとえ世間体は無視しても、書きたいものは書きたい、という姿勢は、メルヴィルがしばしば表明してきたものなのである。しかし、と同時にこれは、「快樂と放縱の生活」を、即「天国」や「罰」の問題へと直結させるエマソンの思考パターンにより招来させるものでもあるに相違ない。実際メルヴィルは、こと「善」「悪」の問題に關する限り、エマソンの言葉には十分な監視の目を光らせていたらしく、例えば「精神の法則」の中の、「人が目にする善と悪の割合は、その人自身の善と悪とに比例する」(Ⅱ、一四八)という言葉に対しては、心底やり切れないといった口調で、次のように記しているのである。

とすると、完全に善である人は悪を目にすることはない、ということになるわけだ——だが、キリストが目にしたのは何なのだ——これだと、「博愛主義者」ハワードといえども、監獄で溢れんばかりの悪を見たからということ、悪いやつだったということになつてしまふ——この馬鹿さ加減を払拭するには、《山上の垂訓》を読んでみるのだ——そして、その意味を考えてみるのだ。(三三〇)

「悪」に対する甘い認識を指弾する声は、『ピエール』にも、『クラーレル』にも認められたものである。だが、ここに記されたのは、虚構というヴェールを脱ぎ捨てられたメルヴィル自身の生の声である。エマソンの稀薄な「悪」感覚に対して、裸形で提示された批判、忠告の言葉である。この言葉は、やがては、おそらく次のようなも

のへと収斂される性格のものである。「詩人」論の中の、「言葉は詩の化石である」(Ⅲ、一二二)とする印象的な一節の余白に、メルヴィルは、さながら自己のエマソン観を集約するかのようになり、こう書き付ける。

エマソン氏の考えには、立派なものが多い。これもまた、見事なものだ。ただ、氏のびっくりするほど巨大な錯誤と幻想は、氏自身の自惚れから生じてくるもので、困ったことにこれは、極度に知的で、かつ堂々としているため、どう呼んでいいかわからないような代物なのである。もう一つの氏の誤ち、というよりも見聞の狭さは、心の領域の欠陥により招来されるものだ。(三三二)

旧牧師エマソンに対して《山上の垂訓》の再読を勧告する激しさは、ここにはない。あるのは、比較的冷静な視座からのエマソン総括の言葉である。もちろん、冷静であるだけに、記された言葉の比重はそれだけ重く、冷静であるだけに、仔細に眺めるならば、このエマソン観は、既に馴染みのものであることが判明する。つまり、エマソンの中に「立派なもの」を認める視点は、既にダイキンク宛の手紙の中に認められたものであり、「錯誤」「幻想」「自惚れ」を指摘する点では、これは、『ピエール』のあの過激な言葉と軌を一にするものである。そして、「心の領域の欠陥」を指摘する視座は、どう見ても、詐欺師のウィンサム観と通底するものなのである。

かくして、書物の余白に書き込まれたエマソン観は、やはり両義的なものであることが判明する。すなわち、このエマソン観は、若いメルヴィルが「認識の衝撃」を体験した時のそれと、確実に符合するものなのであり、両者の間には、歳月の経過はほとんど感じられないものなのである。

だが、このような両義的エマソン観は、果たしてどう解釈されるべきものなのであろうか。「超越主義」という光に照らした場合、両

義的視座に立つメルヴィルは、どのように位置づけられる存在なのであろうか。

## 五

興味あることに、メルヴィルは超越主義的であると見る見方が、今も昔も存在する。ヤンキー哲学の楽天主義をあれほど痛烈にこきおろし、その非人間的冷酷さをあれほど容赦なく暴いてみせたメルヴィルが、である。

ダイキンクはこうした視点でメルヴィルを眺める一人であるが、『マーディ』を評して、「詩的で、思索的、かつ率直な物言いの世界であり、エマソン氏もおそらく納得するに相違ないもの」とした彼は、『白鯨』についても、ほぼ同様の見解を述べる。

信条や見解のこの強引な羅列、エマソン風の気取った無関心主義、あるいはカーライルばりの大仰な文体——これらは、強大な攻撃にも耐えうる力をもつものであり、必ずしも危険なものというわけではない。とはいえ、場ちがいなものであり、心地よいものではない。この世の最も神聖なる思想が、汚され、貶められるのを見ることは、やはり忍びないことである。

雑誌『文学世界』の編集者であったダイキンクのこうした書評は、若いメルヴィルにとつては、心痛むものであったに相違ないが、この厳しい批評の目は、『ピエール』に対しても向けられたものである。この書評は、実は弟のダイキンクの手になるともされるものであるが、いずれにしてもこの書評子は、一般的にも悪評噴々たるこの作品を、「メルヴィル氏は我々が未だ超越しえていない何やら新しい芸術理論に則って、この作品をこしらえたのかもしれない」と評したのである。この物言いは、どうみても作品の「超越」ぶりを皮肉ったものと思われぬ。

ところが、このような見方はかなり根強いものであったらしく、メルヴィルの甥ヘンリー・ガンズヴォートは、叔父メルヴィルが久しぶりに上梓した詩集『戦争詩集』（一八六六）について、父への手紙の中で、

ハーマン・メルヴィルの新作『戦争詩集』を御覧になりましたか。美しいものがいくつもありますよ。でも、不幸なことに、おじさんの場合、エマソンのもの、超越主義的なものがあまりにも目立ちすぎるので、普通の人にはどうしても理解されないのです。でも、今度のものを見ると、おじさんが立派な詩人で、しかも獨創性もあることがわかります。

と、書き残しているのである。

ガンズヴォートのこの手紙は、世間からは既に半ば忘れかけた存在である叔父メルヴィルを、若い身内の者として暖く弁護するかのものであるが、しかしこの手紙は、端なくも、この叔父に対する当時の一般的視点を垣間見させてくれるものでもある。すなわち叔父の世界に「エマソンのもの、超越主義的なもの」が過度なまでに認められることは、この甥でさえも、十分承知していたことなのである。

だが、こうしたメルヴィル観は、二十世紀の今日においても、依然として有効であり、例えば碩学ミラーは、『白鯨』『ピエール』というメルヴィルの代表作を、次のように読み取るのである。

メルヴィルを、悪魔としてのエホバを密かに攻撃する過激なキリスト教徒、と見なす者がいる。生活のために書いているにすぎない、とする者もいる。だが、いずれの場合も、メルヴィルと作中人物とを同一視し、メルヴィルが書いたのはロマンスなのだという事実を忘れてしまっている。メルヴィルの言葉はロマンスのものであって、カルヴィンのものではないのである。スコット、クーパー、バイロン、ルソー、そして「ゲートのようなこの上ないめかし屋さん」等の基本的立場は、エイハブや

ピエールをして破滅へと導くものであるが、メルヴィルは、それが間違っているとは、一言も言っていない。この立場は、償い派、楽観主義者の場合のように頼もしいものとは見えないが、しかし、その中味は同じである。つまり、超越主義のものなのである。

ミラーは、メルヴィルの作品のロマンス性に注目する。そして、キリスト教という伝統的世界とは別の世界に作動するこのロマンス志向は、「償い派、楽観主義者」のそれ、すなわち「超越主義」のそれと、基本的に軌を一にするものだ、と捉える。ロマンスが志向するものと超越主義が志向するものを等価なものとするこの見方は、おそらくは、社会に行きわたる知的風土という視点からこれらを把握しようとするものであり、極めて刺戟的なものである。だが、その点はさて置き、ともかくもミラーは、超越主義者に対して作中であれほど斜に構えてみせたメルヴィルを、皮肉にも、その磁場の内側に位置づけてみせるのである。

だが、とはいえメルヴィルは、より具体的には、どのような意味において超越主義者となりうるのであろうか。

この点が明らかにされるには、当然のことながら、まず「超越主義」の意味範囲が確定されねばならない。そのためには、当事者の言によるのも一つの方法と思われるが、幸いエマソンには、超越主義運動について解説を施したエッセイ「超越主義者」（一八四二）がある。

このエッセイは、エマソンの講演原稿に基づくものであるが、これによると、エマソンの言う「超越主義」とは、「つまりは『観念論』、それも一八四二年におけるそれ」（一、三二九）であるという。これだけはいかにも漠然としているが、更にエマソンはこう補足する。

今日の『観念論』が、ケーニヒスベルグのイマニニエール・カントの用いた『超越的』という言葉で呼ばれていることは、皆さん御存知の通り



です。カントは、感覚による経験の中に予め存在しないものは知性の中には一つもないとしたロックの懐疑の哲学に依りて、経験によるのではなく、むしろ経験を生み出すような一連の不可避的な思考形態があるとし、それはつまりは心の直観であるとして、それを「超越的」構造と名づけました。彼の思想は、驚くほど深遠かつ正確であるため、その用語が欧米で流行することになり、今日では、直観的思考に属するものは、何であれ「超越的」と呼ばれているわけであり、(三三九)

エマソンは、ニューイングランドの地で今興りつつある「超越主義」運動が、つまりはカントの流れを汲むものであることを明白に証言する。しかし、この運動が哲学的体系において自分のそれとどのように絡みあうものなのかという点については、エマソンはさほど詳述しない。詳述するのは、ここに言う「心の直観」、つまり、「超越的」構造の内質についてである。

例えば、エッセイの冒頭、エマソンは、この世の哲学者を、「物質主義者」と「観念論者」とに二分する。そして、前者が、事実・歴史・環境の力・人間の動物的欲望等に重きを置くのに対し、後者は、「思想」・「意志」・「靈感」・「奇跡」・「個々の文化」(三三〇)に目を向けるという。そして更に、このようなベクトルを持つ「観念論者」は、「出来事を語るに際してそれを精神として捉える」(三三〇)と云い、「意識を出発点にして、この世を仮象として捉える」(三三二)とも言う。

この世の事象を「精神」として捉え、世界を「仮象」として眺めるといふこの視座は、さほど理解し難いものではない。むしろ、典型的な観念論者のそれと言ふべきものである。しかしエマソンの解説は、これで終るわけでもない。「心こそ唯一の实在である」(三三三)と断った上で、次のようにも述べる。

観念論者の思想——それが宇宙であります。彼は、一般に世界と呼ばれる事実の連続体を、経験を拠り所として、自分の不可視、不可知の内

奥から流れ出るものとして眺めます。この内奥の世界は、彼自身のものでもあり、事実のものでもあり、そのため彼は、あらゆるものを、主観的あるいは相関的な存在として眺めることができるのです。相関的とはつまり、前述の「内奥」に関連して、ということでもあります。(三三四)

これによると、エマソンの言う「超越的」構造とは、つまりは、唯一の实在としての「心」に、そしてその融通無礙の「内奥」に、全幅の信頼を置く視座に他ならないということになるが、しかし、エマソンの更なる解説によると、この視座の行きつく先は、何やら神秘主義的でもある。格調高い口調で、エマソンはこう述べる。

「超越主義者」は、あらゆる精神的教義を包摂する。奇跡を信じる。と同時に、人間精神が、新しい光や力の流入に対し、常に開放されていることを信じる。靈感を信じ、陶酔を信じる。(三三五)

エマソンのいう「超越主義」とは、かくして、極めて射程の広いものであることが判明する。エマソンの言葉で約言するならば、例えばこれは、「心」を拠り所とする「直観的思考」であり、あるいは、世界を「精神」として、「仮象」として捕捉する姿勢であり、あるいはまた、「奇跡」「靈感」「陶酔」をも信じている神秘的視座でもあるのである。

ところで、射程の広さは、しばしば焦点の不在を意味する。エマソンの説く「超越主義」も、どうやらその例外とは思われないが、しかしエマソンは、この点は重々承知の上である。「理論・倫理、政治、このいづれにおいても、私は詩人であります」(四四六、注記参照)と自己を規定するエマソンにとっては、おそらく「超越主義」という言葉の定義も、詩人的なそれで十分事足りるものであったに相違ないのである。エマソンの見るところ、「あらゆる論理、あら

ゆる叡知は、ソネットや劇の中にあり、形而上的論文の中にはない」(同前)のである。

### むすび

「心」への傾斜、「仮象」としての世界観、神秘的なるものへの惑溺——仮りにこれらがエマソンの超越主義者の平均点特性とするならば、メルヴィルの中にこれを探ることは、さほど困難なことではない。哲学者バッランジャは、「我々の心の中にこそ求めるものはすべて存在する」(Ⅳ、三八〇)と述懐しているし、エイハブ船長は、周知のように、「目に見えるもの、これはすべて厚紙の仮面にすぎない」(Ⅶ、二〇四)とする視座の持ち主なのである。エイハブについて語るイシュメイルはと言えば、鯨について、白について、運命について、折に触れ神秘的冥想へと溺れていく存在であり、すなわちこれらの人物は、この意味では、いづれ劣らぬ超越主義者なのであり、エマソンの雰囲気を漂わせた人物なのである。だが、忘れてならないのは、これらの人物は、畢竟作中人物であり、これを操る作者の視点そのものは、さほど単純なものではないということである。

例えば「心」への傾斜について言うならば、バッランジャの先の言葉は、「心」こそ唯一の実在であるとするエマソンのそれと、確かに手を結ぶものに相違ない。だが、この視座をメルヴィルが確実に支持するという確かな保証は、どこにもない。いや、メルヴィルは、こうした視座に対してはむしろ懐疑の視線を向けていたとさえ思われるのであり、例えば『ピエール』では、悲劇的歩みを辿る若い主人公に対し、「人間の魂とは怖るべきものなのだ。おのれの内なる世界で道に迷うよりは、太陽軌道の外へと放り出された方がましなのだ」(Ⅹ、三九六)とする忠告の言葉を送り、と同時に、この「内なる世界」への旅を、ピラミッドの内奥へのミイラ探究の旅

に喩えて、次のようにも述べているのである。

限りない労苦を重ねて、我々はピラミッドの中へと掘り進む。身も縮むばかりの暗中摸索を経て、ついに深奥の部屋へと到達する。石棺をみつけ、喜び勇んで、蓋を開ける。だが、そこには、人のかけらとてないのだ——人間の魂とは、かくも恐ろしく、空ろにして、巨大なものなのだ。(同、三九七)

「内なる世界」に対するこの視座は、文字通り虚無的なものと言う他ないが、この虚無性は、エマソンとは無縁のものである。「自分の心の奥底で真実だと思ふことは万人にとつても真実であると思ふこと」(Ⅱ、四五)——ためらうことなく、エマソンはこう言う。しかも、心の奥底が疚しい場合にはどうすべきなのか、という予想される反論に対しては、「そんなことはないとは思ふが、かりに私が《悪魔》の子だとしたら、《悪魔》として生きるまでだ」(同、五〇)と答えるだけなのである。何とも単純明快にして、単眼的、楽天的視座と言わねばならない。

楽天性と虚無性、単眼性と複眼性——エマソンとメルヴィルは、この一点において峻別されねばならない。もちろん両者の間には、共通項は確かに認められる。内なる世界に目を向け、外なる世界をその反映として捉えるという点では、二人は軌を一にする。だが、認識の回路は同じでも、辿りつく地平は同一のものとは限らない。「世界と呼ばれる事実の連続体を、経験を抛り所として、自分の不可視、不可知の内奥から流れ出るものとして眺め」(前出)というエマソンは、おのれの内なる世界と外なる世界を滑らかに接続する連続体として捉え、しかもそこに全幅の信頼を寄せる。だが、メルヴィルはそのようには捉えはしない。内と外との二つの世界は、そもそも完璧には捕捉し難い世界であり、しかもその両者の間には、黒々と口を開けた恐怖の断絶が、確実に控えているのである。「人の魂の中には、平和と歡喜にあふれた一個のタヒチ島がある。だが、

その回りには、恐ろしい海が緑の島を取り囲むように、半ば知られざる生の恐怖が控えているのだ。この島からは、断じて漕ぎ出してはならない。帰還はありえないのだ。」(Ⅶ、三四九)

一八四九年の冬、駆け出しの作家メルヴィルは、今を時めく超越主義者エマソンの講演を聞く。そして、そこで、功罪相半ばする両義の価値を認める。以後メルヴィルは、様々な形でエマソンに反応していくことになるが、この姿勢は、一貫して保持されるものである。メルヴィル自身、決して非超越主義的であったわけではな<sup>い</sup>。ただ、エマソンの超越主義者であるためには、おそろしくメルヴィルの視点は、あまりに虚無的、複眼的に過ぎたのである。「彼は信じていることができない。不信の中で安らぐこともできない。どちらか一方を選ばなければ、あまりにも正直すぎ、勇敢すぎるのだ」とは、ホーソーンの記したメルヴィル観であるが、ホーソーンが見て取ったこの不安定、宙ぶらりんな精神構造は、「超越主義」という時代風潮に対するメルヴィルの姿勢と、おそろしく通底するものと相違ないであろう。

注

- (1) ホーソーン、メルヴィル、エマソンのテキストは、それぞれ次のようにしてある。 *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press). *The Works of Herman Melville* (Constable and Company Ltd.). *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson* (AMS Press, Centenary Edition). (以下、拙訳では、括弧内のローマ数字は巻数、漢数字はページ数を示す。また、傍点に引用者で「」二重キマは原文大文字を示す。)
- (2) F. O. Frothingham, *Transcendentalism in New England* (University of Pennsylvania Press, 1972), p. xxv.
- (3) *The Norton Anthology of American Literature*, ed. Ronald Gotesman et. al. (W. W. Norton & Company, 1979), I, pp. 1820

(4) 『巨鯨』の巻末に次の通り。「IN TOKEN OF MY ADMIRATION FOR HIS GENIUS/ THIS BOOK IS INSCRIBED/ TO/ NATHANIEL HAWTHORNE」

- (5) Eleanor Melville Metcalf, *Herman Melville: Cycle and Epicycle* (Greenwood Press, Publishers, 1970), p. 110.
- (6) *Ibid.*, pp. 57—58.
- (7) *Ibid.*, pp. 58—59.
- (8) Merton M. Sealts, Jr., "Melville and Emerson's Rainbow," *ESQ*, XXVI—2 (1980), p. 53.
- (9) *Ibid.*
- (10) Leon Howard, *Herman Melville: A Biography* (University of California Press, 1967), p. 129.
- (11) "Melville and Emerson's Rainbow," pp. 57—58.
- (12) Cf. Merrell R. Davis, *Melville's Mardi: A Chartless Voyage* (Anchor Books, 1967), pp. 179, 181n., 199.
- (13) "Melville and Emerson's Rainbow," p. 59.
- (14) Leon Howard, "Introduction," *Moby Dick: or, The Whale* (Random House, 1950), p. xiii.
- (15) *Herman Melville: A Biography*, p. 153.
- (16) *Ibid.*, pp. 162—179.
- (17) 『ホーソーン』の巻末に次のように記されている。 Cf. Raymond J. Nelson, "The Art of Herman Melville: The Author of *Pierre*," *The Yale Review*, LIX—2 (1969), p. 262.
- (18) Cf. Jay Leyda, *The Melville Log* (Gordian Press, 1969), p. 450.
- (19) Christopher W. Sten, "Bartleby the Transcendentalist: Melville's Dead Letter to Emerson," *MLQ*, XXXV—1 (1974), pp. 30—44.
- (20) Egbert S. Oliver, "'Cock-A-Doody-Do!' and Transcendental Hocus-Focus," *NEQ*, XXI—2 (1948), pp. 204—216.
- (21) ホーソーンは「ホーソーン」の語を「ホーソーン」の語から導き出したと述べている。 Cf. "Melville and Emerson's Rainbow," p. 69.

- (27) Cf. "Melville and Emerson's Rainbow," p. 71; William B. Dillingham, "Neither Believer Nor Infidel": Themes of Melville's Poetry," *Personalist*, XLVI—4 (1965), p. 505.
- (28) William Braswell, "Melville as a Critic of Emerson," *American Literature*, IX—3 (1937), pp. 317—334.
- (29) *Ibid.*, p. 319.
- (30) 大抵、書物に対する田舎ムソウ、価値観の異なるからである。
- (31) Cf. *Herman Melville: Cycle and Epicycle*, p. 108; *Pierre*, pp. 424—425.
- (32) *The Melville Log*, p. 299.
- (33) *Ibid.*, p. 437.
- (34) *Ibid.*, p. 457.
- (35) *Ibid.*, p. 682.
- (36) Perry Miller, "Melville and Transcendentalism," *Nature's Nation* (Harvard University Press, 1967), p. 194.
- (37) Randall Stewart, *Nathaniel Hawthorne: A Biography* (Yale University Press, 1961), pp. 169—170.

(一九八四年六月二十五日受理)